

日本人の宗教意識／宗教性に関する質問諸項目の 方法論的な検討

—「日本人の国民性調査」の二次分析—

真鍋 一史[†]

(受付 2021 年 3 月 4 日；改訂 10 月 14 日；採択 10 月 15 日)

要 旨

本稿は、「日本人の国民性調査」の二次分析をとおして、日本人の宗教意識／宗教性に関する質問諸項目の理論的な背景を探るとともに、それらの内容と形式を再検討する方法論的な試みである。まず、前者については、関連調査報告書の記述内容の検討が課題となる。そして、後者については、第 13・14 次調査データを用いたそれら質問諸項目に対する「回答の分布」の検討から始めて、つぎにそれら諸項目の「信頼性」と「妥当性」の検討へとデータ分析を進めていく。

以上の検討から、つぎのようなことが確認される。(1) 質問諸項目の内容の理論的な背景は必ずしも明確でなく、それら諸項目の形式についても十分な検討がなされているとはいえない。(2) 質問諸項目の「関連マトリックス」「因子分析」「クロンバックの α 係数」による検討から、それらが「共通の内容」を含むものであることが示唆されるものの、それらの「関係性」「構造化」「信頼性」のレベルは低い。(3) 諸項目の「妥当性」の検討から、いくつかのケースで「理論的に予測された関係」が確認されず、それらの諸項目のほかの諸項目との「異質性」が示唆される。

では、なぜこのような結果がでてくることになったのであろうか。その原因の探索が今後の課題となる。具体的な方略としては、(1) 本稿で試みた「量的分析」と選択肢の「記入欄」の内容分析などの「質的分析」とを組み合わせた mixed methods approach の試み、(2) 選択肢の「表現形式」の影響についての実験計画法のアイデアにもとづくシステマティックな検討、があげられる。

キーワード：「日本人の国民性調査」、二次分析、理論的な背景、構造分析、項目の妥当性の検討。

1. はじめに

本稿は、「日本人の国民性調査」の二次分析 (secondary analysis) をとおして、日本人の宗教意識／宗教性に関する質問諸項目の「理論的な背景」を探るとともに、それらの「内容」と「形式」を再検討する方法論的な試みである。

では、なぜ、このような方法論的な検討を行なうかという、それは、「日本人の国民性調査」が、一方においては、日本が世界に誇るべき貴重な社会調査の実践の 1 つとして高く評価されながらも、他方においては、その質問紙作成のための理論的な背景の部分が必ずしも明確

[†] 統計数理研究所 客員教授：〒190-8562 東京都立川市緑町 10-3

ではなく、質問諸項目の「内容」と「形式」に関する方法論的な検討も決して十分になされてきたとはいえないからにはほかならない(真鍋, 2019a, 2019b)。

本稿は、「日本人の国民性調査」の二次分析をとおして、このような方法論的な検討を試みるものである。一般に、「一次分析(primary analysis)」が調査を実施し、データを収集し、その結果を分析することを指すのに対して、そのようにして収集されたデータを用いて、新たな視座—理論・仮説・方法—から、新たなデータ分析を行ない、新たな知見とその解釈、そして理論化の方向を導き出すことを「二次分析」と呼ぶ—二次分析の歴史・現状・課題については、真鍋(2012)を参照されたい—。そこで、本稿の「新たな視座」が問われることになる。すでに述べたところから明らかのように、「日本人の国民性調査」における、人びとの宗教意識／宗教性に関する質問諸項目に焦点を合わせ、それらの理論的な背景を探るとともに、質問諸項目の「内容」と「形式」に方法論的な検討を加えるというのが、本稿における二次分析のための「新たな視座」ということになる。

このような「新たな視座」は、以下のような筆者の「問題関心」によって導かれる。そもそも、ここでの質問諸項目というものは、宗教意識／宗教性に関する「理論変数」に対応する「経験変数」という位置づけがなされるはずのものである。そこで、これら質問諸項目の作成段階において、どのような「理論変数」を想定していたのかの確認が必要となる。そして、そのような確認を踏まえた上で、つぎに、これらの質問諸項目は宗教意識／宗教性のどのような側面を測定しようとしていたのかの確認が必要となる。これは、一般に、「測定モデル(measurement model)」の実証的な確認と呼ばれるものにほかならない。本稿の二次分析は、このような「問題関心」によって導かれるものである。

こうして、本稿は、「日本人の国民性調査」の宗教意識／宗教性に関する質問諸項目に焦点を合わせ、その調査結果—質問諸項目に対する回答の度数・パーセンテージなどを「記述」する、いわゆる「調査報告」ではなく、そのような質問諸項目の「理論的な背景」の確認と、質問諸項目による「測定モデル」の確認をめざす方法論的な試みとすることができる。

しかし、このような試みは、本稿が初めてというわけではない。すでに、2017年度データサイエンス共同利用基盤施設「ROIS-DS-JOINT / 一般共同研究」をとおして、第13次調査(2013年)の宗教意識／宗教性に関する質問諸項目の二次分析の機会が与えられた。その分析結果をまとめたものとして、真鍋(2019a, 2019b)がある。

では、それら前稿と本稿の違いがどこにあるかという点、それは、本稿では、第14次調査(2018年)のデータ分析を行ない、その結果を前回の第13次調査のデータ分析の結果と比較するというところにある。

では、このような「比較」には、どのような意義があるのであろうか。この点については、以下の2つをあげることができるであろう。

①今回のデータ分析をとおして、前回のデータ分析の結果と同じ結果が得られるとするならば、それは前回のデータ分析の「知見」の、今回のデータ分析による「確認」ということになり、それによって、そのような「知見」の確実性がより大きなものとなるということである。

②今回のデータ分析をとおして、前回のデータ分析の結果と異なる結果が導かれるとするならば、それは人びとの宗教意識／宗教性の「時系列的な変化」の発見の機会となるということである。

以上のような問題関心に導かれて、本稿は、①「日本人の国民性調査」における質問諸項目の作成の「理論的な背景」の探索と、②日本人の宗教意識／宗教性を捉えるための質問諸項目の「形式」の検討、から始めることとする。

2. 二次分析としてのデータ分析の準備作業

2.1 「日本人の国民性調査」における質問諸項目の作成の「理論的な背景」の探索

「日本人の国民性調査」は、1953年に第1次調査、1958年に第2次調査が実施され、それら2回の調査結果をとりまとめて、その調査報告書、『日本人の国民性』（林、1961）が出版された。そこで、林知己夫は、この調査プロジェクトにおける質問諸項目の作成のプロセスについて説明している（pp. 27-52）。それは、日本人の国民性—具体的には、日本人の「性格」「個人的態度」「宗教」「家・子ども」「人間関係」「男女の差異」「社会・文化・倫理・法の問題」「政治的態度」「日本人・外国人」—に関する書籍、雑誌、新聞などの文献・資料を収集するとともに、その記述内容を、約3000枚のカードに書きぬき、それらにもとづいて調査の質問諸項目を作成していったという手順である。このような質問諸項目の作成のもととなった記述の内容の詳細は、付録V（pp. 530-54）に収録されている。

そこで、筆者の問題関心からするならば、以上のような質問諸項目の作成のプロセスに関しては、つぎのような「問題」が提起されることになる。

(1) 「日本人の宗教意識／宗教性」という概念の定義をどうするかという問題がある。そのような「日本人の宗教意識／宗教性」の問題に先立って、「国民性(national character)」という概念について、林は、つぎのように書いている。

「国民性の問題は従来、日本だけでなく諸外国においても数多く研究されているが、その方法は、文献・資料にもとづく概念的なものが多く、したがって現象の説明的解釈に終わっている」（p. 27）。

そこで、林は、このような「洞察的方法」に代わって、「国民性」という概念を「操作的(operational)」に定義することを提案する。こうした操作的定義の方法論的な特徴は、つぎの2点にまとめられる。

①質問紙調査の結果の「回答の分布」から国民性を判断するという A. Inkeles (1997) の提案する「最頻的パーソナリティ(modal personality)」というアイデアと同様の考え方が採用されている。

②社会学の伝統的な概念には、collective consciousness と aggregate consciousness がある。Collective consciousness というのは、ある社会や集団の意識を全体として示す概念であり、それは個々人の意識の総和を超えた独自の性格があるとする「方法論的全体主義(methodological collectivism)」の考え方に立つ概念である。ところが、林は「個人を単位として、その人の示す多くの面での意見を総合してみても、その総合された特性の集団的特性を見る」（p. 29）としている。ここで、林のいう「総合」とは aggregate を意味する用語であり、そこには、国民性を aggregate consciousness として捉えようとする、いわゆる「方法論的個人主義(methodological individualism)」の立場が表明されている。

以上のような「国民性」という概念をめぐる議論からして、そのような「国民性」の下位概念として位置づけられる「人びとの宗教意識／宗教性」は、「宗教という対象に対する最多数の人びとの見方・考え方・感じ方・行動の仕方」と定義されるものと考えられる。しかし、このような定義からは「宗教とは何か」という宗教概念の範囲の問題—哲学者、西谷啓治(1996)の用語でいうならば「宗教と非宗教の間」という問題—がでてくることになる。

(2) 「日本人の国民性調査」においては、その質問諸項目の作成にあたって、それまでの文献・資料における「日本人の国民性」をめぐるさまざまな記述の「収集」「分類」「選択」の準備作業から始めたという。ここでは、質問諸項目の作成のプロセスが説明されている。しかし、こ

のような説明は、その知的営為の「再現性(reproducibility)」を担保する「プロセス提示型」(海野, 1981の用語)の説明にはなっていないという問題を残している。それは具体的にいうならば以下のような問題である。

i) 文献・資料の「収集」について、林はつぎのように述べている。

「国民性に関して記述してあるすべての文献からの確率標本の抽出はできなかった。(中略)取りあげた文献はわれわれの入手しうる範囲で、書籍、雑誌、新聞によった」(p.31).

この説明からは、以下のような問題がでてくる。

①文献・資料の収集の方法・範囲が明確でない。

②前者の「方法」ということに関して、筆者—真鍋(1985, p.257-281), 真鍋(1998, pp.356-432)—は、かつて、「日本人論の検証」と「市民意識の検証」において独自の方法を提案したが、このような文献・資料の収集の具体的な方法については説明がない。

③後者の「範囲」ということに関しては、本稿のテーマである日本人の宗教意識／宗教性について、日本の「宗教学」「宗教社会学」の領域における学術書が参照されたかどうかは明らかではない。そしてさらに、日本人の宗教意識／宗教性に関する文献・資料という場合、その範囲の判断はどうするのかという問題がでてくる。例えば、和辻(1992)は、そこに宗教という言葉はまったくでてこないにもかかわらず、『竹取物語』に仏教の影響を認めているが、それは現世の権力一帝や皇族や兵隊によって象徴される—を超えた超自然界—人間界のものではない「かぐや姫」とその帰っていく「月の世界」によって象徴される—の存在が示唆されている点において明らかであるという。そうだとするならば、このような宗教・仏教などの言葉のでてこない文献・資料も収集の対象となってくるのであろうか。

ii) 文献・資料の記述の「分類」と「選択」について、林はつぎのように書いている。

「国民性についていろいろ論議されている内容をカードにとり、これを分類し、このうちから一対一の面接調査法における質問として、妥当な回答がとれるようなもののみを選択した」(p.29).

しかし、ここに記された文章のみから、その「分類」と「選択」のプロセスを追体験することは不可能である。

いずれにしても、以上のようなプロセスを経て、林たちは、第1次調査の調査票(質問紙)を完成させたが、本稿のテーマである日本人の宗教意識／宗教性に関する質問は、17項目となった(p.37)。それらの項目は、調査の回を重ねるとともに少なくなり、第13次、第14次の調査では、それらは以下の表1のとおり4項目となっている。しかし、なぜ、どのように、項目数を減らしてきたのかについては、関連資料に明確な説明はない。

2.2 日本人の宗教意識／宗教性を捉えるための質問諸項目の「形式」の検討

「日本人の国民性調査」における質問項目の「形式」を、林は、「自由回答法の質問」「意見を提示し、賛否を求める質問」「一般的な意見を聞き出す質問」「相反する条件の比較を求めた質問」など11のタイプに分類している。しかし、以下に示した問12、問13a、問13b、問14の日本人の宗教意識／宗教性に関する4つの質問項目は、この分類基準からするならば、すべて「一般的な意見を聞き出す質問」となる。そこで、筆者は、これら4つの質問項目に対する「回答の選択肢」のつぎのような「表現形式」に注目する。

表 1. 「日本人の国民性調査」における宗教意識／宗教性に関する質問諸項目。

問12 あなたはどちらかといえば、先祖を尊ぶ方ですか、それとも尊ばない方ですか？				
1	2	3	4	5
尊ぶ方	普通	尊ばない方	その他 〔記入〕	わからない
問13 a) 宗教についておききしたいのですが、 たとえば、あなたは、何か信仰とか信心とかを持っていますか？				
1				2
もっている、信じている				もっていない、信じていない、関心がない
a) それでは、いままでの宗教にはかかわりなく、「宗教的な心」というものを、大切だと思いますか、それとも大切だとは思いませんか？				
1	2	3	4	
大切	大切でない	その他 〔記入〕	わからない	
問14 あなたは「あの世」というものを、信じていますか？				
1	2	3	4	5
信じる	どちらとも きめかねる	信じては いない	その他 〔記入〕	わからない

問 12 先祖を尊ぶか？

1. 尊ぶ → ポジティブな方向
2. 普通 → 0 ポイント
3. 尊ばない → ネガティブな方向

問 13(a) 信仰・信心を持っているか？

1. 持っている・信じている → ポジティブな方向
2. 持っていない・信じていない → ネガティブな方向

問 13(b) 宗教的な心は大切か？

1. 大切 → ポジティブな方向
2. 大切でない → ネガティブな方向

問 14 「あの世」を信じているか？

1. 信じる → ネガティブな方向
2. どちらとも決めかねる → 0 ポイント
3. 信じていない → ネガティブな方向

以上から、これら 4 項目は Louis Guttman の Facet Theory の用語でいうならば、attitude, belief あるいは values といった「content の方向」で構成されているものの—Facet Theory については、Levy (1994), 真鍋 (2002, 2021) を参照されたい—、その選択肢の「表現形式」の点においては、それらは①ポジティブとネガティブの相対する方向からなる形と、②真ん中に 0 ポイントを置き、その両側にポジティブの方向とネガティブの方向を配した形、の 2 つのタイプに分けられることがわかる。しかし、データ分析の「経験則 (a rule of thumb)」からするならば、このような選択肢の表現形式によっても、質問諸項目間の「関係性」は大きな影響を受ける—このような影響は、“format effect”と呼ばれている—。

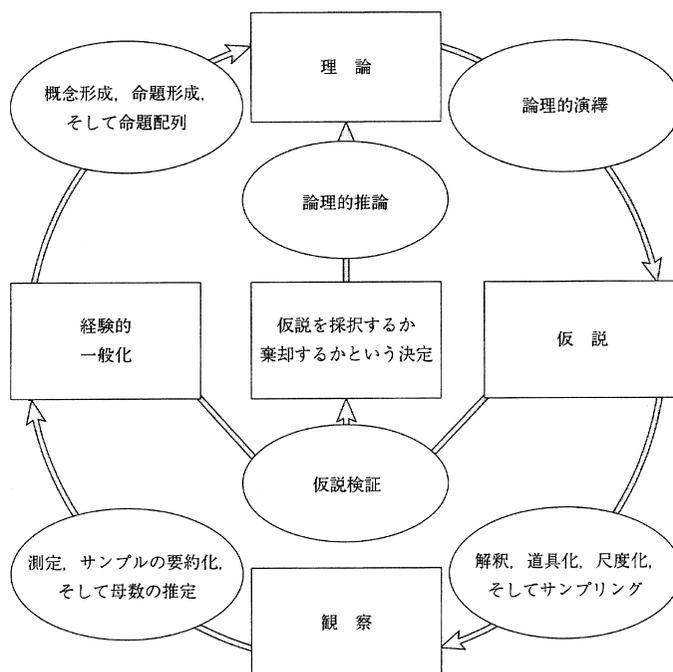


図 1. 「ワラスの輪」と呼ばれる研究過程のモデル。Wallace (2018) より転載。

さて、以上のような 2 つの準備作業をめぐって、ここで筆者の二次分析の出発点を「再」確認しておきたい。それは以下のようにまとめられるであろう。

現代の社会調査、そして社会測定の基本的な考え方の 1 つとして、図 1 に示した「ワラスの輪」(Wallace, 1971) と呼ばれる研究過程のモデルがある。このモデルからするならば、「質問紙法」という技法による「観 察」は、「理論」から論理演繹的に導かれる「仮説」にもとづいて作成される「質問諸項目」を用いて行なわれる。人びとの宗教意識／宗教性がテーマとされる場合であれば、そのための質問諸項目は、宗教意識／宗教性という「理論変数」に対応する「経験変数」という位置づけがなされるはずのものである。そこで、二次分析は、これら質問諸項目がどのような「理論変数」から導かれたものであるかを確認することから出発するのが常道ということになる。ところが、「日本人の国民性調査」においては、このような「理論的考察 (theoretical consideration)」の部分が必ずしも明確でない—ここでは、図 1 の「ワラスの輪」でいえば、右側の下降過程の側面に焦点を当てて議論してきたが、さらに左側の上昇過程の側面についての議論も、当然ありうる—。

それとともに、このような議論の延長線上で、さらに指摘しておくべき点として、林たちの「一次分析」にもとづく報告書・単行本・論文などにおける、日本人の宗教意識／宗教性の諸相をめぐる記述で用いられてきた用語の多くが、宗教社会学の領域で確立されてきた「専門用語」であるよりも、むしろ人びとの日常生活において使用されている「日常用語」であるということがある。この点についての詳細は、筆者による前稿 (真鍋, 2019a, pp. 279-282) を参照されたいが、ここでも指摘しておかなければならないことがある。それは、このような宗教意識／宗教性というテーマに関する質問紙調査の結果の記述・分析・解釈をめぐって、一方の欧米においては「概念・用語の意味内容の標準化 (standardization)」ともいうべき方向が確立されてきた

(Hill and Hood, Jr., 1999 を参照)のに対して、他方の日本においては「日常用語の豊饒性」ともいべき現象が顕著である。では、なぜそうなのかということ、それは簡単に答えられるような「問い」ではないかもしれない。しかし、少なくとも日本人の宗教意識／宗教性が、欧米のキリスト教社会のそれとくらべて、きわめて「多次元性」のレベルの高いものであるからであるということとは間違いのないであろう。こうして、上述の日本人の宗教意識／宗教性を捉える4つの質問項目が、それぞれそのような「多次元性」を包含するものとなっている可能性もきわめて高いといえるのではなかろうか。このような問題関心が、筆者による「日本人の国民性調査」の二次分析の具体的な「視座」となる。

3. 宗教意識／宗教性に関する質問諸項目のデータ分析

以上に述べてきた筆者の問題関心—そして視座—にもとづいてなされるデータ分析は、人びとの宗教意識／宗教性を捉えようとする質問諸項目の「測定の道具(measurement instrument)」としての有効性の再検討—ここでの検討が、「一次分析」に際してなされたであろう方法論的な検討に対して、「二次分析」における問題関心／視座からする検討であるという意味において、再検討という表現を用いた—を主眼とするものである。

では、このような有効性の再検討は、具体的にどのように行なうかということ、それは、まず質問項目に対する回答の結果—つまり「回答の度数分布」—にもとづく検討から始めて、つぎに、それぞれの項目の「信頼性(reliability)」と「妥当性(validity)」にもとづく検討へと進めていくという仕方である。後者の「信頼性」と「妥当性」にもとづく検討のねらい・目的・目標については後述するが、前者の「回答の度数分布」にもとづく検討については、「単純集計表」(表2)に見られる「その他・わからない」という回答の%の大きさを確認しておくことが重要な課題となる。その結果、それが「宗教的な心は大切か」という質問において、第13次調査：13%、第14次調査：18%と、やや高くなっていることがわかる。この結果をどのように「解釈」するかについては、真鍋(2019b)を参照されたいが、ここでは以下のデータ分析を進めるにあたって、このことを記憶にとどめておくことが大切である。

3.1 質問諸項目に対する回答の度数分布の検討

(1) 質問の回答の選択肢の形式に合わせて「回答の度数分布」を見ていくという方法

4つの質問項目の単純集計表(表2)を見ていくならば、「先祖を尊ぶか」では、「尊ばない」(13%)→「普通」(28%)→「尊ぶ」(59%)、「信仰・信心を持っているか」では、「持っている」(26%)→「持っていない」(74%)、「宗教的な心は大切か」では、「大切でない」(30%)→「大切」(70%)というように、回答の%が一方方向に向かって大きくなっているものの、問14「あの世を信じるか」では、「信じない」(36%)←「どちらともきめかねる」(21%)→「信じる」(43%)というように、回答の%が真ん中で低く、両極で高いという形—いわゆる「バイモーダルな分布(bimodal distribution)」—となっていることがわかる。この結果から、三項選択型の選択肢の場合には、middle pointの選択肢のところの%が「中間の値」をとるパターンと、「最小の値」を取るパターンの2つのパターンがあることがわかる。このような結果の「解釈」については、さらなる検討が必要となる。

(2) 宗教意識／宗教性の諸相を視覚的に描写するという方法

ここでの方法は、4つの質問項目に対する回答結果を、それぞれの項目に対する肯定的な回答の%の大きさに応じて、下層から上層へと積み上げ、ピラミッドの形で図形的に描写するという方法である。結果は図2のとおりである。

確かに、このような図形で表わすならば、日本人の宗教意識／宗教性の諸相についての全体

表 2. 宗教意識／宗教性に関する質問諸項目の単純集計.

問12 先祖を尊ぶか：リコード後

		第13次調査 (K型)			第14次調査 (K型)		
		度数	%	有効%	度数	%	有効%
有効	尊ばない方 (1点)	180	11.3%	11.5%	202	12.8%	13.0%
	普通 (2点)	356	22.4%	22.7%	443	28.0%	28.5%
	尊ぶ方 (3点)	1032	64.9%	65.8%	912	57.6%	58.6%
	合計	1568	98.6%	100%	1557	98.3%	100%
欠損値	その他	6	0.4%		4	0.3%	
	D.K.	17	1.1%		23	1.5%	
	合計	23	1.4%		27	1.7%	
合計		1591	100%		1584	100%	

問13a 信仰・信心を持っているか：リコード後

		第13次調査 (K型)			第14次調査 (K型)		
		度数	%	有効%	度数	%	有効%
有効	もっていない・信じていない (1点)	1151	72.3%	72.3%	1175	74.2%	74.2%
	もっている・信じている (2点)	440	27.7%	27.7%	409	25.8%	25.8%
合計		1591	100%	100%	1584	100%	100%

問13b 「宗教的な心」は大切か：リコード後

		第13次調査 (K型)			第14次調査 (K型)		
		度数	%	有効%	度数	%	有効%
有効	大切でない (1点)	328	20.6%	23.8%	388	24.5%	29.9%
	大切 (2点)	1053	66.2%	76.2%	909	57.4%	70.1%
	合計	1381	86.8%	100%	1297	81.9%	100%
欠損値	その他	47	3.0%		48	3.0%	
	D. K.	163	10.2%		239	15.1%	
	合計	210	13.2%		287	18.1%	
合計		1591	100%		1584	100%	

問14 「あの世」を信じるか：リコード後

		第13次調査 (K型)			第14次調査 (K型)		
		度数	%	有効%	度数	%	有効%
有効	信じてない (1点)	530	33.3%	35.8%	540	34.1%	36.1%
	どちらとも (2点)	310	19.5%	21.0%	308	19.4%	20.6%
	信じる (3点)	639	40.2%	43.2%	648	40.9%	43.3%
	合計	1479	93.0%	100%	1496	94.4%	100%
欠損値	その他	10	0.6%		2	0.1%	
	D.K.	102	6.4%		86	5.4%	
	合計	112	7.0%		88	5.6%	
合計		1591	100%		1584	100%	

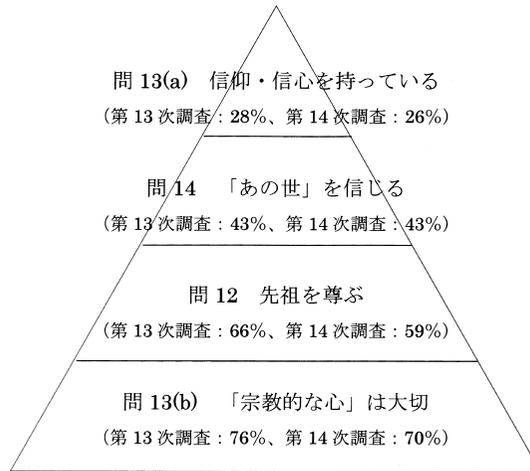


図 2. 日本における宗教意識の諸相のピラミッド。

像ともいべきものが、具体的な形でイメージできることになる。それは、一方の最下層の「宗教的な心は大切」という回答(70%)と、他方の最上層の「信仰・信心を持っている」という回答(26%)の2つの極—この2つの極は、後述する「ポスト近代化の時代の宗教意識／宗教性」と「伝統的な宗教意識／宗教性」を示唆している—の存在が示されており、その2つの極の中間に、「先祖を尊ぶ」という回答(59%)と、「あの世を信じる」という回答(43%)が位置づけられる形となっているということである。

この結果から日本人の宗教意識／宗教性についての以下の示唆がえられることになる。いうまでもなく、そのような示唆は、再び「比較」という視座から導かれることになる。そして、ここでの比較は、「信仰・信心を持っている」と「宗教的な心は大切」という2つの「回答の%」の比較という視座とともに、宗教意識／宗教性についての「国際」比較という視座でもある。具体的にいうならば、前者は、「自分自身は信仰・信心を持っていない」が「宗教的な心は大切だと思う」という回答者の存在を示す知見とその知見の解釈をめぐるものである。このような回答傾向は、第1次調査から継続して見出されてきたもので、林・林(1995)、吉野(1994, 1998, 2001)によって、「伝統的・近代的なものの見方・考え方・行動の仕方」「義理・人情という人間関係のあり方」とともに、「日本人の国民性」を特徴づける主要な「項目・次元・尺度」の1つとして位置づけられてきた。つまり、それは「日本人の宗教に対する考え方の特徴である」「日本人の基底意識ともいえる」として nation specific なものとして「解釈」されてきたのである。

しかし、これまで国際比較調査のデータ分析をとおして欧米の宗教意識／宗教性の変化を時系列的に跡づけてきた筆者の視座からするならば、それは日本に固有な宗教意識の特徴というよりも、むしろ欧米の宗教意識／宗教性の変化の方向との共通の側面を示唆しているように思われる。

欧米の宗教社会学の領域における宗教の変化に関する理論としては、「世俗化理論」「宗教変形理論」「宗教市場理論」が中心的なものといえる—これらの詳細については真鍋(2020)を参照されたい—。ここでとくに「宗教変形理論」に注目するならば、このような理論の萌芽は Luckman(1967)にまで遡ることができる。Luckmanは、一方で伝統的な制度化された宗教が衰退してきたとするが、しかし他方で人びとが宗教を求める心を喪失したわけではないという。そうではなくて、人びとの心のなかに「見えない宗教(invisible religion)」が現われてきたと

いう。つまり、産業社会の進展にともなう宗教の変化を、宗教的な「心」の衰退としてではなく、その社会的な「形態」の変化—私化／個人化・非可視化への変化—として捉えたのである。

このような宗教の変化についての考え方を、新たな視座—宗教とは何かという、その定義と範囲に関わる視座—から、国際比較調査の典型的な事例の1つである「世界価値観調査(World Values Survey)」にもとづいて、さらに展開したのが、Inglehart (1997), Norris and Inglehart (2004)である。そこでは、社会の進展にともなう、人生の意味や目的について深く考えようとする人びとが増えていくが、そのような人びとは伝統的な信仰や宗教集団には背を向ける人びとであるとして、「ポスト近代化の時代の宗教意識／宗教性」と「伝統的な宗教意識／宗教性」が二項対立的に位置づけられることになる。

以上のような議論からするならば、欧米の理論的・実証的研究における「見えない宗教」あるいは「ポスト近代化の時代の宗教意識／宗教性」という概念は、「日本人の国民性調査」における「宗教的な心」という概念と内容的にはかなり等価(equivalent)なものといえるのではなかろうかという問題関心がでてくることになる。

そして、そうだとするならば、日本と欧米の国々において、少なくともこのような宗教意識／宗教性の側面においては、「共通性」ともいうべきものができてきているといえるのではなかろうか。このような人びとの宗教意識／宗教性の変化は、欧米のキリスト教社会においてよりも、もっと以前に、すでに日本社会においてその顕現化が始まっていたのではなかろうか。このように、人びとの宗教意識／宗教性の変化についての実証的な証拠を提供するという意味において、「日本人の国民性調査」には国際比較の視座からして、きわめて大きな意義があるといわなければならないのである。繰り返しになるが、「日本人の国民性調査」は、日本人の宗教意識／宗教性の「独自性」「特異性」を見出したという点において意義があるというよりも、むしろその欧米との「共通性」「類似性」を示唆することになったという点において意義があるというのが、ここでの筆者の重要な論点である。

最後に、以上のような日本人の宗教意識／宗教性に関する4つの質問項目に対する「回答の度数分布」の形は、第14次調査に固有な結果であるかどうか、問われることになる。そこで、ここでの結果を第13次調査とくらべてみるならば、その全体的な傾向性から見るかぎり、両者に大きな違いは見られない。それでも両者に5%以上の差ができてきているところをあげておくとするならば、「先祖を尊ぶ」が66%から59%に、そして「宗教的な心は大切」が76%から70%に、それぞれ減少している。これが1つの「趨勢」として継続していくものであるかどうかは、今後のきわめて興味深い重要な研究課題であるといえよう。

3.2 日本人の宗教意識／宗教性に関する4つの質問項目の「内容」の検討

このセクションの課題は、4つの質問項目に含まれる意味内容の検討ということである。このような課題に対して、ここでは社会心理学における「態度の構造」の研究と、社会学における「社会意識の構造」の研究という2つの系譜のなかから「構造分析」というアイデアを援用する。それは、具体的にいうならば、上述の4つの質問項目の相互間の「関係の様相」ということを意味する。つまり、ここでは、そのような「構造」の「分析」をとおして、4つの質問項目の「内容」の検討を試みるのである。では、そのような「構造分析」のために、どのような実証的なデータ分析の「技法」が開発されてきたかという点、「相関マトリックス」「因子分析」「クローンバックの α 係数」があげられる。そこで、本稿においても、以下のデータ分析—「構造分析」—において、これらの技法を利用することを試みるのである。

しかし、本稿では、これらの技法を用いたデータ分析に先立って、欧米の宗教意識／宗教性の研究領域においては、これらの技法の利用が特別な意味を持つものであったということを確認しておきたい。それは、一言でいうならば、欧米のキリスト教社会においては、人びとの宗

教意識／宗教性を捉えるために作成されてきた質問諸項目は、相互に高い相関関係を示し、そこからは1因子が抽出され、クロンバックの α 係数の値も大きいということが、繰り返し見出されてきたということである。つまり、このようなデータ分析の技法によって、欧米においては人びとの宗教意識／宗教性と呼ばれるものが、きわめて明確で、堅固で、盤石であることが確認されてきた。そして、このような質問諸項目間の「関係の様相」こそが、「構造」と用語で呼ばれるに相応しいものと考えられてきたのである。

ところが、時を経て、欧米のキリスト教社会においても、このような宗教意識／宗教性の「構造」に、ある変化の兆候が観察されるようになってくる。これまで欧米の宗教意識を表現する場合に用いられてきた「信念体系」という用語が、まさにその「体系」という点において、疑問視されるようになってくるのは、まさにこのようなコンテキストにおいてであった。こうして、欧米の宗教社会学において、このような宗教意識／宗教性の変化に関する諸理論—「世俗化理論」「宗教変形理論」「宗教市場理論」など—の構築の試みが始まった(真鍋, 2020)のである。

では、このような「国際比較」という視座からして、日本においては、どのような結果が導かれることになるであろうか。以上が、ここでのデータ分析の問題関心である。

(1) 相関マトリックスによる検討

相関マトリックスは、 n 個の変数の相互間のすべての単純相関係数を $n \times n$ のマトリックスの形に示したものである。ここでは、以上の4項目を用いて、相関係数の値が、行においても列においても対角線から離れるにつれて、段階的に小さくなるという順にそれらの項目を並べて「相関マトリックス」(表3)を作成した。このような項目の順序の意味については後述する。

こうして作成した「相関マトリックス」は、つぎの2つの段階で検討していく。

①相関係数の「正負」の符号の検討

「相関マトリックス」において、6つの枠内の相関係数の「符号」は、すべて正(プラス)となっていることがわかる。この結果は、宗教意識／宗教性に関する4つの質問項目が、それぞれ相互に「排他的」であるよりも、むしろ「累積的」であることを示している。社会測定の研究領域における先駆的な研究者の一人である Louis Guttman は、「相関マトリックス」において観察されるこのような現象を、人間行動—質問紙調査という方法で捉えられる人間行動—の「第一の法則」と呼んだ(Levy, 1994; 真鍋, 2002, 真鍋, 2021)。ここでは、日本人の宗教意識／宗教性に関する4つの質問項目についても「第一の法則」が成り立つことが確認されたのである。そして、「第一の法則」が成り立つということは、それらの質問項目が「共通の内容」—いうまでもなく、ここでは「宗教意識／宗教性」という共通の内容—を含むものであるといえるということである。このような「法則」の確認が、今回のデータ分析の第一歩となる。

②相関係数の「数値の大きさ」の検討

「相関マトリックス」における相関係数の値は、0.3台が1ケース、0.2台が3ケース、0.1台が2ケースで、それらの値はデータ分析の「経験則」からして、決して高いものとはいえない。この結果からするならば、日本人の宗教意識／宗教性をこれら4項目で捉える—そのような「測定モデル(measurement model)」を構成する—かぎりにおいては、その「構造化のレベル」は、決して高いものとはいえない。これは、そもそも日本人の宗教意識／宗教性が構造化されていないので、その「事実」がそのまま反映されて、このような結果がでてきたのか、それとも、これら4項目が日本人の宗教意識／宗教性の「測定の道具」として適合的でなかったから、いわば“artifact”ともいべきものとして、このような結果となったのかは、ここでのデータ分析では確認することは不可能である。

さらに、「相関マトリックス」の検討—傾向性・法則性の読み取り—におけるもう1つの視座についても述べておきたい。初めに「相関マトリックス」の作成の手続きについて、ここで

表 3. 宗教意識/宗教性に関する質問諸項目間の関係の相関マトリックス.

(第 13 次調査)

	Q12a 信仰・信心を持っているか	Q12b 「宗教的なところ」は大切か	Q11 先祖を尊ぶか	Q13 「あの世」を信じるか
Q12a 信仰・信心を持っているか				
Q12b 「宗教的なところ」は大切か	.302 ***			
Q11 先祖を尊ぶか	.202 ***	.221 ***		
Q13 「あの世」を信じるか	.148 ***	.177 ***	.194 ***	

*** p < .001, ** p < .01, * p < .5, N=1,285

(第 14 次調査)

	Q13a 信仰・信心を持っているか	Q13b 「宗教的なところ」は大切か	Q12 先祖を尊ぶか	Q14 「あの世」を信じるか
Q13a 信仰・信心を持っているか				
Q13b 「宗教的なところ」は大切か	.352 ***			
Q12 先祖を尊ぶか	.218 ***	.241 ***		
Q14 「あの世」を信じるか	.198 ***	.172 ***	.226 ***	

*** p < .001, ** p < .01, * p < .5, N=1,228

表 4. 宗教意識／宗教性に関する質問諸項目の因子分析.

第13次調査

説明された分散の合計							因子行列	
因子	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			因子	1
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %		
1	1.628	40.70	40.70	.860	21.51	21.51	Q11 先祖を尊ぶか	.430
2	.885	22.14	62.83				Q12a 信仰・信心を持っているか	.500
3	.791	19.78	82.61				Q12b 「宗教的なところ」は大切か	.554
4	.696	17.39	100.00				Q13 「あの世」を信じるか	.344

第14次調査

説明された分散の合計							因子行列	
因子	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			因子	1
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %		
1	1.696	42.41	42.41	.962	24.04	24.04	Q12 先祖を尊ぶか	.443
2	.889	22.22	64.63				Q13a 信仰・信心を持っているか	.565
3	.778	19.45	84.07				Q13b 「宗教的なところ」は大切か	.566
4	.637	15.93	100.00				Q14 「あの世」を信じるか	.371

の4項目を「調査票(質問紙)」における質問の順番に並べてマトリックス表を作成するのではなく、相関係数の値が行においても列においても、対角線から離れるにつれて、段階的に小さくなるような順番で項目を並べると記した。そして、確かに、今回のデータについてはこのような「相関マトリックス」の作成が可能であった。そして、このこと自体が、今回のデータ分析の「知見」であった。いうまでもなく、このような手続きは、Guttmanの「スケール・アナリシス」のアイデアにもとづくものである。Guttmanは、「相関マトリックス」に見られるこのような相関係数の大きさの順位の構造を「シンプレックス(Simplex)」と呼び、そのような「ランク・オーダーの体系」が示されている場合は、それらの諸項目は「一次元の尺度(Guttman scale)」を構成するという。しかし、今回のデータ分析において、そのような「スケール」の構成に意味があるかという、それは決して納得できるものとはいえない。それは、いうまでもなく、「相関マトリックス」に示された個々の数値が決して大きなものとはいえないということだけでなく、さらに「相関マトリックス」に示された数値の大きさの「ランク・オーダーの体系」—「信仰・信心を持っている」「宗教的な心は大切」「先祖を尊ぶ」「あの世を信じる」というランク・オーダーのパターン—について、いわば「社会学的な意味」ともいべきものを見出すことが不可能である—少なくとも筆者にとっては—からにはほかならない。

最後に、このような「相関マトリックス」についての第13次調査と第14次調査の比較をとおして、両者の結果がほとんど同じ傾向を示していることが確認された。

(2) 探索的因子分析による検討

以上において、4つの質問項目は「相関マトリックス」における相関係数の「正負の符号」の検討をとおして、「共通の内容」を含むものであることが示唆された。しかし、それと同時に、同じく、相関係数の「数値の大きさ」の検討をとおして、その「内容の共通性」のレベルは高いものではないということも示唆された。このような示唆を「探索的因子分析」という技法を用いて確認するというのが、ここでのデータ分析のねらい・目的・目標である。

因子分析の結果は、表4のとおり、1因子が抽出されたことを示している。この結果は、これら4項目が1つの「共通因子」—宗教意識／宗教性という「共通因子」—を持っていることを

確認するものである。では、それぞれの項目ごとの「因子負荷量」がどのくらいであるかというところ、それらは0.3台から0.5台の値にとどまっている。日本では、一般に、0.4以上といったところが「それぞれの項目」と「抽出された因子」との関連性が強いという判断の基準とされている(渡邊, 2012, p.148)。ところが、欧米の国々には、「因子負荷量は0.6以上でなければならない(Jagodzinski・真鍋, 2013, p.24)」とされている。事実、調査時期、質問諸項目の内容、そしてそのワーディングや選択肢の形などは異なるものの、例えば1998年の「国際社会調査プログラム(International Social Survey Programme: ISSP)」の各国の宗教意識／宗教性に関する質問諸項目のデータ分析の結果(真鍋, 2020, p.222)からするならば、「ドイツ」「フランス」「アメリカ合衆国」においては、「因子負荷量」は多くの場合、0.6台から0.8台の値を示している。

これらの結果とくらべるならば、今回の「日本」の値は、やはり低いレベルにある。さらに、ISSPのデータ分析での「日本」の「因子負荷量」は、0.5台から0.6台の値を示しており、この結果とくらべても、今回の「日本人の国民性調査」での「因子負荷量」の値は、やはり低いレベルのものといわざるをえない。

いうまでもなく、探索的因子分析は、以上のような結果を「記述」する—浮き彫りにする—技法であっても、そのような結果を「説明」する—なぜ、そのような結果がでてきたかを「説明」する—技法ではない。

最後に、このような第14次調査の因子分析の結果は、第13次調査の場合とほとんど同じであったことを指摘しておきたい。

(3) 「クロンバックの α 係数」による検討

繰り返しになるが、本稿での問題関心は、「上述の4つの質問項目は、同じように、日本人の宗教意識／宗教性を捉えているであろうか」というものである。そこで、これら4つの質問項目間に「内的整合性(internal consistency)」が確認されるとするならば、それらの項目は「同一のもの」—つまり、日本人の宗教意識／宗教性という「同一のもの」—を捉えていると判断することができる。そして、このような質問諸項目間の「内的整合性」の判断のために、「信頼性係数(coefficient of reliability)」が用いられる。「信頼性係数」にはいろいろなものが開発されてきているが、ここではその最も代表的な「クロンバックの α 係数(Cronbach's Alpha coefficient)」を用いる。では、 α 係数がどのくらいの値であれば「内的整合性」が確認できたといえるかというところ、この点については一般に0.7以上(0.6以上で許容できる)というのがその基準とされている(渡邊, 2012, p.150; 三輪, 2007, p.232)。

今回のデータ分析での「クロンバックの α 係数」は0.499という結果になっている(表5)。上述のISSPのデータ分析においては、「クロンバックの α 係数」は「ドイツ」「フランス」「アメリカ合衆国」では0.8台から0.9台の値となっており、「日本」でも0.8台という値を示している。今回の「日本人の国民性調査」における4項目についての「内的整合性」のレベルはかなり低いものといわなければならない。

最後に、「クロンバックの α 係数」の値についての、第13次調査(0.457)と第14次調査(0.499)の比較からは、両者にほとんど違いはないという結果が導かれる。

以上、(1)(2)(3)の3つの統計的な技法を用いた「日本人の国民性調査」の宗教意識／宗教性に関する4つの質問項目の検討の結果、これら4項目は、一方で宗教意識／宗教性という「共通な部分」を含みながらも、他方でそれぞれ「異質な部分」を持つものであることが示唆された。では、この「異質な部分」は具体的にどのような内容のものなのであろうか。いうまでもなく、ここで利用した統計的な技法をもってしては、このような疑問に直接的に答えることは不可能である。ただ「直接的」に答えることは不可能であるにしても、「間接的」にその「手がかり」を得ることはできる。それは、「相関マトリックス」において、「相関係数の数値の大きさ」に示され

表 5. 宗教意識／宗教性に関する質問諸項目の信頼性の分析.

	第13次調査		第14次調査	
	N	%	N	%
有効数	1285	80.8%	1228	75.9%
除外数	306	19.2%	389	24.1%
合計	1591	100%	1617	100%

※ 「除外数」はリストワイズ法による欠損値指定によって除外されたサンプルの数を示す

信頼性統計量 (Cronbach のアルファ)	
第13次調査	第14次調査
.457	.499

項目が削除された場合のCronbach のアルファ	第13次調査	第14次調査
	先祖を尊ぶか	.358
信仰・信心を持っているか	.387	.419
「宗教的な心」は大切か	.371	.421
「あの世」を信じるか	.450	.484

た「関係性」の大きさが、「信仰・信心」と「宗教的な心」の場合とくらべて、「あの世」そして「先祖」の場合で小さいということ、そして同じく「4つの項目ごとの因子負荷量」が、「信仰・信心」「宗教的な心」にくらべて、「あの世」そして「先祖」で低いということである。以上の結果は、一方の「信仰・信心」「宗教的な心」と、他方の「先祖」「あの世」との間に、やや意味内容の「隔たり」ともいえるべきものがあることを示唆しているといえるかもしれない—因みに、このような「示唆」をめぐって、第13次調査と第14次調査に「違い」といえるものは見られない—。そして、そのような「手がかり」をより確かなものにするために、さらにもう1つの別の角度からの質問諸項目の検討を試みる。それは、これらの4項目についての「構成概念妥当性 (construct validity)」の検討である。

3.3 「日本人の宗教意識／宗教性に関する4つの質問項目」と「ほかの質問項目」との関係の検討

社会科学の領域において、構成概念の測定 の妥当性は、どのようにして判断されるであろうか。この点については、「ある構成概念がほかの変数と理論的に予測される関係を示しているとするならば、その構成概念の測定には妥当性がある」(Lewis-Beck, 1994)と判断するという考え方が一般的である。ここでは、その線上で、具体的な分析を以下のように進めていく。

まず、ある変数とほかの変数との関係性の確認においては、そのための「青写真」あるいは「ロードマップ」の役割を果たす「仮説的図式」が必要となる。それは「宗教意識／宗教性に関する4項目」を「鍵変数」として設定し、その「原因変数」と「結果変数」とを組み合わせて構成される。それが、図3の「データ分析のための仮説的図式」である。

この「仮説的図式」においては、「原因変数」として「宗教意識／宗教性」の規定要因と考えられる「ソシオ・デモグラフィック諸項目」—「F1 性」「F2 年齢」「問46 学歴」「地点 No: 居住地域の人口規模」—を、そして「結果変数」として「宗教意識／宗教性」によって規定されると考えられる「人びとの個人的-社会的な意識や価値観の諸項目」—「問16 他人の役に立とうとしているか」「問17 他人はあなたを利用しようとしているか」「問18 人は信頼できるか」「問29 世の中のためになることをするか」—を取りあげる。ここでの規定関係は、左から右へ、つまり「原因変数群」から「宗教意識／宗教性変数群」へ、そして「宗教意識／宗教性変数群」から「結果変数

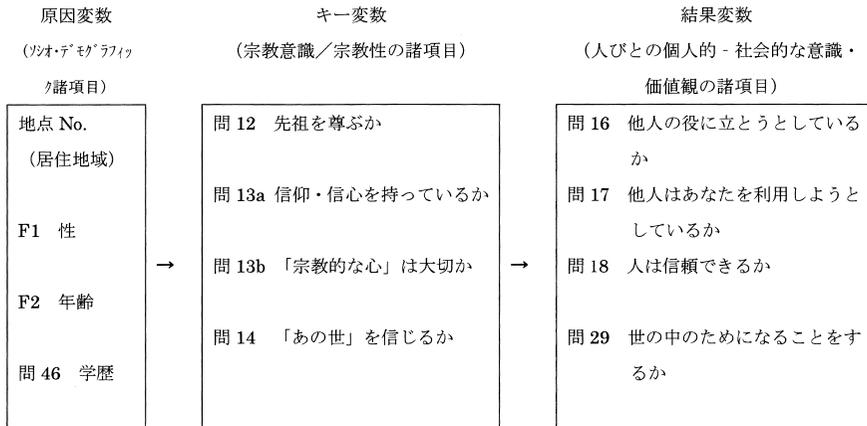


図 3. データ分析のための仮説的図式.

群]へという流れで示されている。こうして、このような関係性で示される理論仮説の確認が、ここでの分析課題となる。

では、このような理論仮説は、具体的にはどのようにして構成されたかということ、それは、宗教意識／宗教性の研究領域における先行研究—理論研究と実証研究—に関する「文献研究 (literature survey)」にもとづいて整理された以下のような諸「命題」を踏まえてなされたのである (真鍋, 2020)。

A. 「ソシオ・デモグラフィック変数」と「宗教意識／宗教性」との関係に関する諸命題

1. 女性は男性よりも宗教性のレベルが高い。
2. 高年層は若年層よりも宗教性のレベルが高い。
3. 低学歴層は高学歴層よりも宗教性のレベルが高い。
4. 町村住民は大都市住民よりも宗教性のレベルが高い。

B. 「宗教意識／宗教性」と「個人的・社会的な意識や価値観」との関係に関する諸命題

1. 宗教性のレベルの高い人は、低い人よりも「他人の役に立とうとする」という回答のレベルが高い。
2. 宗教性のレベルの高い人は、低い人よりも「他人は自分を利用しようとしている」という回答のレベルが低い。
3. 宗教性のレベルの高い人は、低い人よりも「人は信頼できる」という回答のレベルが高い。
4. 宗教性のレベルの高い人は、低い人よりも「世の中のためになることをする」という回答のレベルが高い。

つぎに、図 3 の「仮説的図式」に示された「ある変数とほかの変数との理論的に予測される関係」をどのように測定するかという問題に答えなければならない。このような変数間の関係性の測定のためには、さまざまな統計的な方法が開発されてきている。ここでは、より初等的なレベルの分析から始めることにする。それは、筆者が以前から “Item Validity Approach” という名のもとに独自に用いてきた方法であるが、Braun and Johnson (2010) では、まったく同じアイデアにもとづく、同じ手続きの方法が “Interaction Plot of Item Means” という名のもとに用いられている。因みに、そこでは「平均値の比較」の議論もなされているが、ここでは、それが便宜的な 1 つの測度にすぎないということを指摘するにとどめる。

(A)「仮説的図式」の前半部分の確認のために、「ソシオ・デモグラフィック変数」—①性, ②年齢, ③学歴, ④居住地域—を x 軸に、「宗教意識／宗教性」の変数を y 軸に置き, 2 変数間の関係を「宗教意識・宗教性」の「平均値」をプロットした点をつないだ「折れ線グラフ」の形によって示すという方法をとる。

(B)「仮説的図式」の後半部分の確認のためには, 今度は「宗教意識／宗教性」の変数を x 軸に、「個人的-社会的な意識・価値観」に関する変数を y 軸に置き, 同じく 2 数間の関係を「個人的-社会的な意識・価値観」の「平均値」をプロットした点をつないだ「折れ線グラフ」の形によって示すという方法をとる。

ここでは, 以上の(A)と(B)からなる 2 種類のデータ分析の実際について, もう少し具体的かつ詳細に説明しておきたい。

(1)原因変数としてのそれぞれの「ソシオ・デモグラフィック諸項目」のランク・オーダーの方向はつぎのとおりとする。

地点 No(居住地) : 6 大都市	→	町村
F1 性 : 男	→	女
F2 年齢 : 20 歳台	→	70 歳以上
問 46 学歴 : 短大・大学・大学院	→	小中学校

(2)それぞれの結果変数の選択肢に与える点数は, つぎのとおりとする。なお, それぞれのランク・オーダーの方向は()内に示した。

問 12 先祖を尊ぶか? (尊ばない → 尊ぶ)

1. 尊ぶ → 3 点
2. 普通 → 2 点
3. 尊ばない → 1 点

問 13a 信仰・信心を持っているか? (持っていない・信じていない → 持っている・信じている)

1. 持っている・信じている → 2 点
2. 持っていない・信じていない → 1 点

問 13b 「宗教的な心は」大切か? (大切でない → 大切)

1. 大切 → 2 点
2. 大切でない → 1 点

問 14 「あの世」を信じているか? (信じていない → 信じている)

1. 信じる → 3 点
2. どちらともきめかねる → 2 点
3. 信じていない → 1 点

問 16 他人の役に立とうとしているか? (自分のことだけ → 他人の役に立つ)

1. 他人の役に立とうとしている → 2 点
2. 自分のことだけに気をくばる → 1 点

問 17 他人はあなたを利用しようとしているか? (利用 → そんなことはない)

1. 利用しようとしている → 1 点
2. そんなことはない → 2 点

問 18 人は信頼できるか? (用心 → 信頼)

1. 信頼できる → 2 点
2. 用心する → 1 点

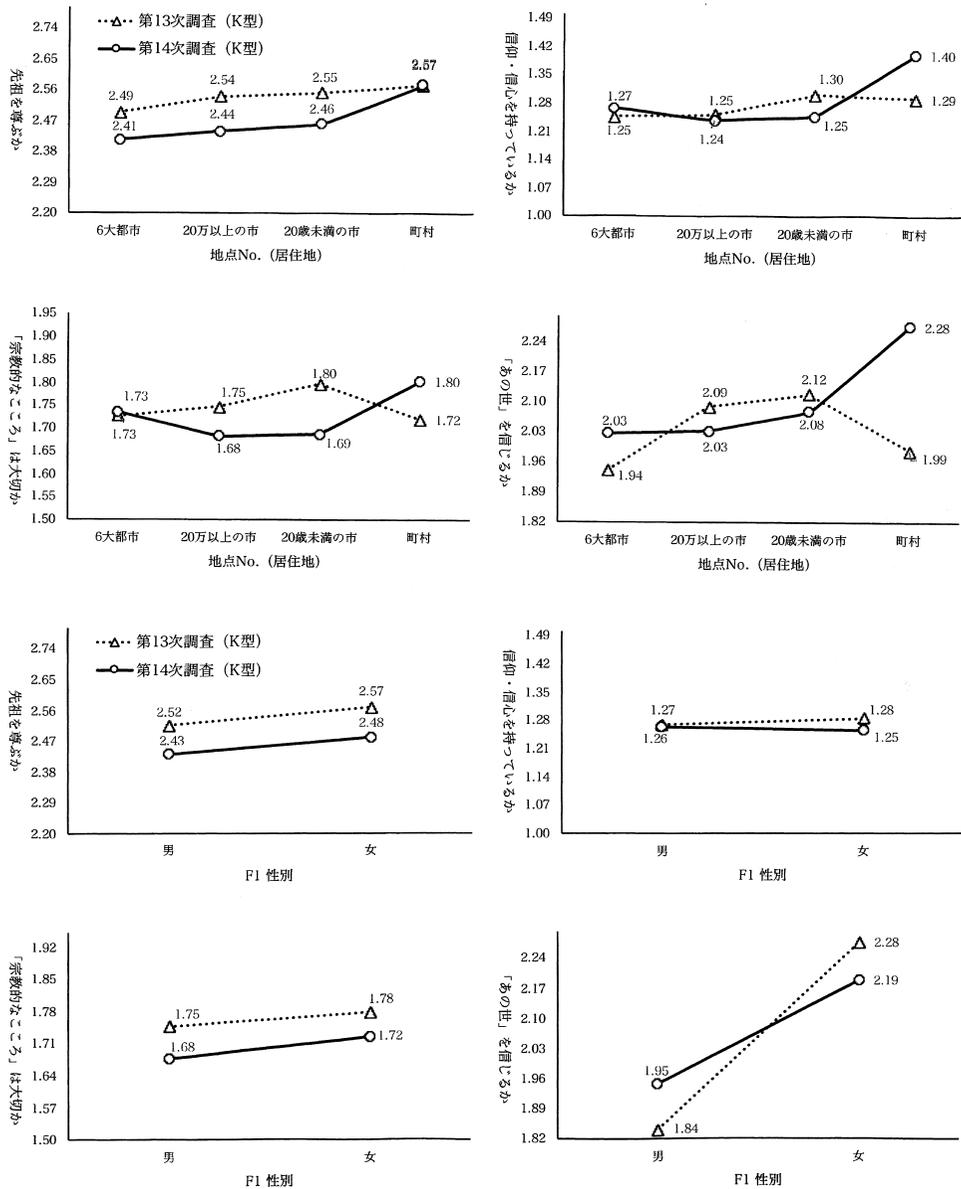


図 4. 「ソシオ・デモグラフィック諸項目」と「宗教意識／宗教性の 4 項目」の関係を示す折れ線グラフ。

問 29 自分がしあわせにくらすか？ それとも、世の中のためになることをするか？

(自分のしあわせ → 世の中のため)

- 1. 自分がしあわせにくらす → 1 点
- 2. 世の中のためになることをする → 2 点

(3)それぞれの x 軸のカテゴリに対応する y 軸の平均値を計算し、その値をグラフ上に

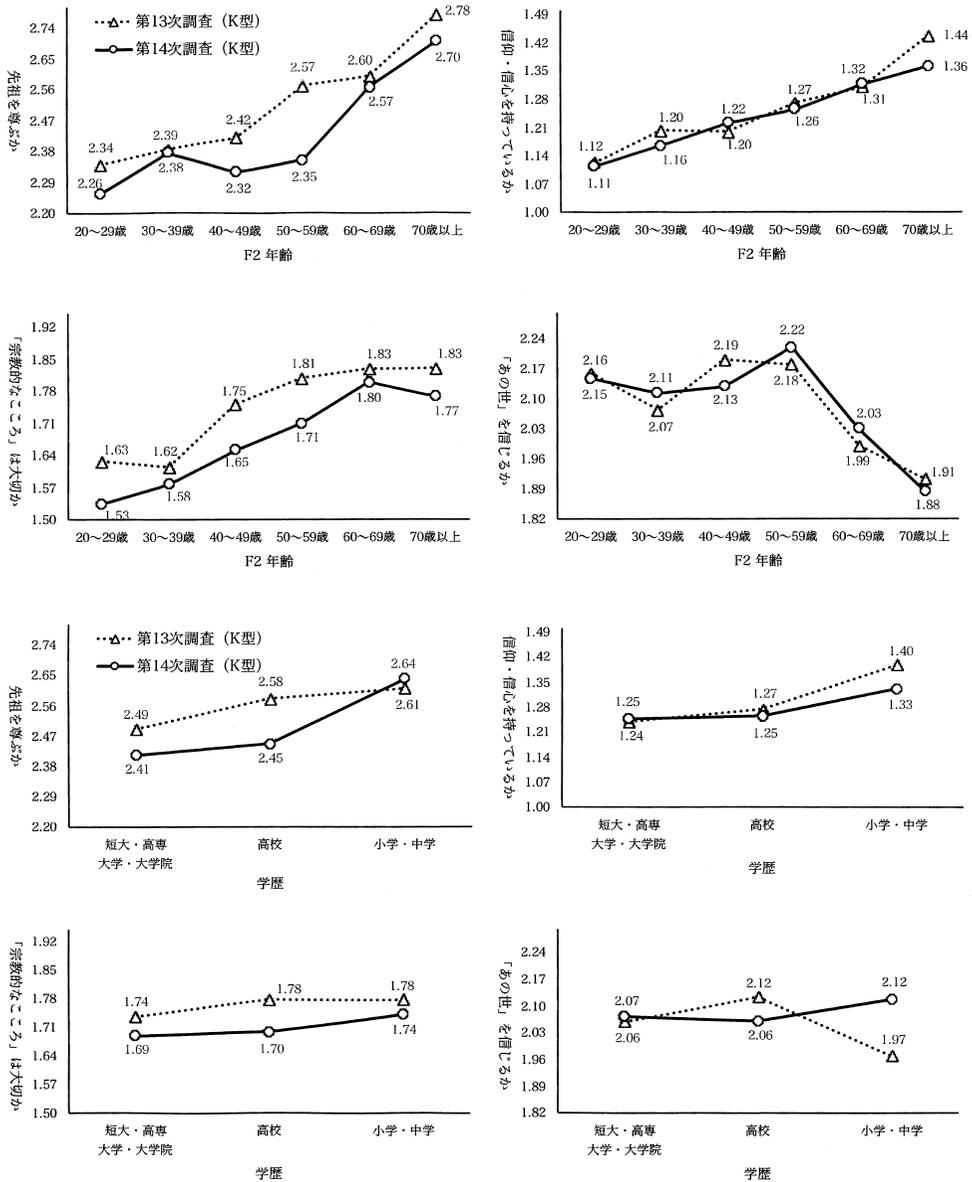


図 4. つづき.

ロットし、これらの点を結んで「折れ線グラフ」を描く。

以上のような手続きによって作成された図 4 と図 5 の「折れ線グラフ」は、ここでの問題関心からして、どのように検討していくことになるのであろうか。いうまでもなく、ここでのねらい・目的・目標は、先行諸研究にもとづく「理論諸仮説」が、これら「折れ線グラフ」に示された諸結果によって、実証的に確認されるかどうかのチェックをとおして、日本人の宗教意識／宗教性を捉えるために作成された 4 つの質問項目のそれぞれのほかの質問諸項目との「異質性」と

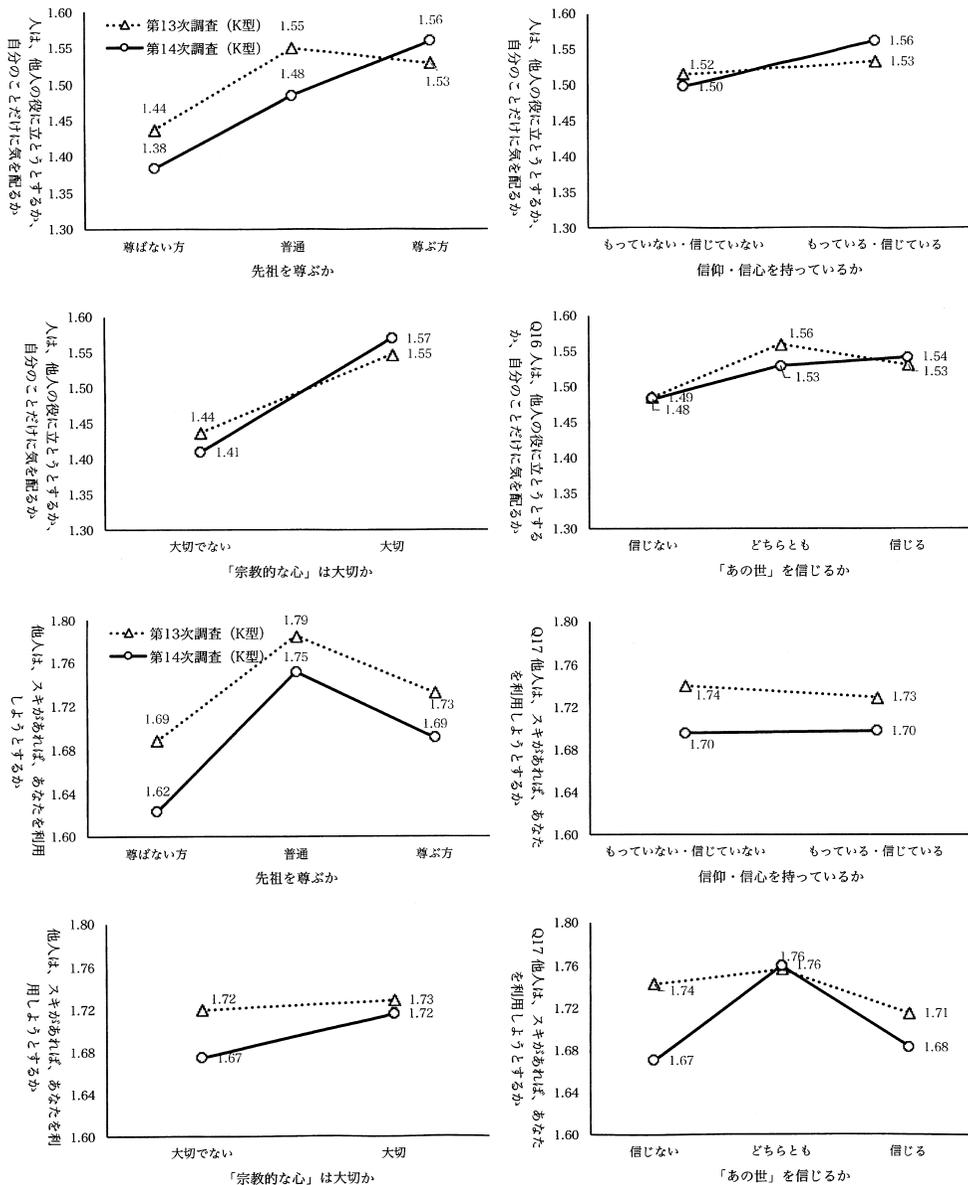


図 5. 「宗教意識／宗教性の 4 項目」と「個人的-社会的な意識・価値観の諸項目」の関係を示す折れ線グラフ。

もいうべきものを探るといったところにある。以下においては、このような検討結果を、具体的に記していきたい。

A. 「ソシオ・デモグラフィック諸項目」と「宗教意識／宗教性の 4 項目」との関係

(1) 居住地域

宗教意識／宗教性のどの「項目においても、「居住地域」の人口規模が小さくなるにつれて、そ

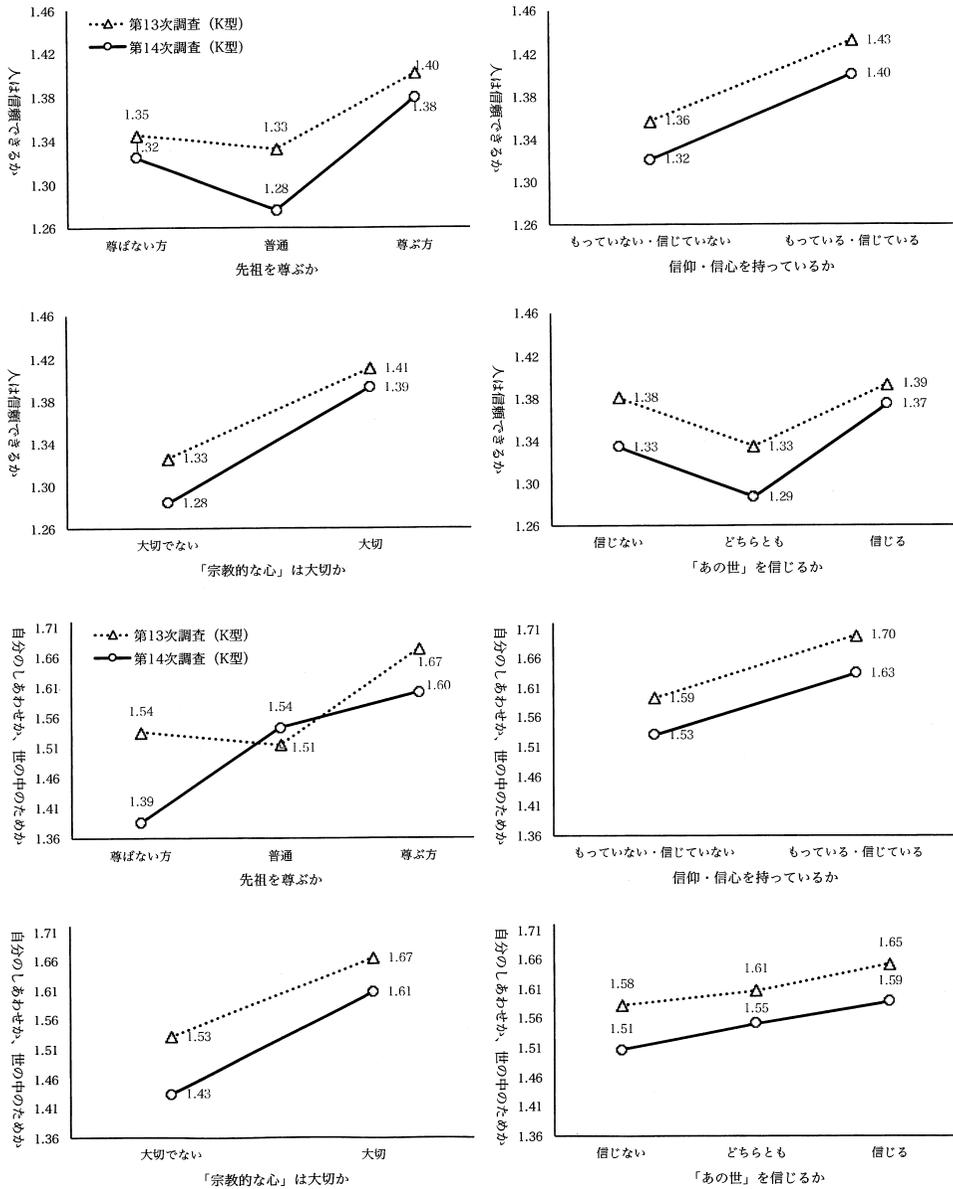


図 5. (つづき)

のレベル(平均値)が高くなる。A-4の仮説(命題)は確認されたといえる。ここでは、いずれかの質問項目の「異質性」といったことは見られない。

(2)性別

「信仰・信心を持っているか」の場合を除いて、「男性」よりも「女性」の方で宗教意識／宗教性のレベル(平均値)が高い。つまり、A-1の仮説(命題)は確認できる。ところが、「信仰・信心を持っているか」の場合は、「男女差」がほとんど見られない。「信仰・信心」についての質問項目

は、この点において、ほかの 3 項目との「違い」が見られる。

(3) 年齢

「あの世を信じるか」の場合を除いて、年齢が高くなるにつれて、宗教意識／宗教性のレベル(平均値)が高くなる。つまり A-2 の仮説(命題)は確認されたといえる。ところが「あの世を信じる」の場合は、年齢が高いところ—60 歳台, 70 歳以上のところ—で、そのレベルが低くなる。この項目は、この点において、ほかの 3 項目との「違い」が見られる。

(4) 学歴

宗教意識／宗教性のどの項目においても、学歴が低くなるにつれて、そのレベル(平均値)が高くなる。そこで、A-3 の仮説(命題)は確認されたといえる。ここでは、いずれかの質問項目の「異質性」といったことは見られない。

B. 「宗教意識／宗教性の 4 項目」と「個人的-社会的な意識・価値観の諸項目」との関係

(1) 他人の役に立とうとしているか？

宗教意識／宗教性のどの項目の場合においても、そのレベル(平均値)が高くなるにつれて、「他人の役に立とうとする」レベルは高くなっている。B-1 の仮説(命題)は確認されたといえる。ここでは、いずれかの質問項目の「異質性」といったことは見られない。

(2) 他人はあなたを利用しようとしているか？

ここでは、折れ線グラフに 3 つのパターンが見られる。

①「先祖を尊ぶ」と「あの世を信じる」の 2 つのケースにおいて見られる negative, middle, positive, の 3 つの選択肢の middle のところで平均値が高く、negative と positive のところでそれが低い—ただし、両者をくらべると前者よりも後者で、その値は高い—「山型」のパターン、

②「信仰・信心を持っている」のケースにおいて見られる「持っていない」と「持っている」で平均値の高さがまったく同じレベルで、x 軸と平行線を描くパターン、

③「宗教的な心は大切」において見られる「大切でない」から「大切」に向かって平均値が高くなる「右肩上がり」のパターン、の 3 つのパターンである。

ここでは、③のケースを除いて、質問項目に「異質性」が示唆される。

(3) 人は信頼できるか？

ここでのパターンは 2 種類に分かれる。

①「先祖を尊ぶ」と「あの世を信じる」の 2 つのケースにおいて見られる、(2)-①の「山型」の場合と対照的な、浅い「V字型」のパターンで、平均値が negative, positive の両極のところよりも、middle のところで低い—ただし、negative と positive をくらべると、前者よりも後者で、その値が高い—パターン、

②「信仰・信心を持っている」と「宗教的な心は大切」の 2 つのケースで見られる negative から positive に向かって平均値が高くなる「右肩上がり」のパターン、の 2 つのパターンである。ここでは、①のケースにおいて、質問項目に「異質性」が示唆される。

(4) 世の中のためになることをするか？

宗教意識／宗教性のどの項目においても、「右肩上がり」のパターンが見られる。

ここでは、いずれかの質問項目の「異質性」といったことは見られない。

以上の A. 「ソシオ・デモグラフィック項目」と「宗教意識／宗教性の 4 項目」との関係を示した「折れ線グラフ」の検討と、B. 「宗教意識／宗教性の 4 項目」と「個人的-社会的な意識・価値観の諸項目」との関係を示した「折れ線グラフ」の検討、をとおして、「宗教意識／宗教性の 4 項目」

のそれぞれの、「構成概念妥当性」の視座からする、「異質性」の検討を進めてきた。宗教意識／宗教性に関する質問項目に、以上のように「異質性」が示唆される「平均値」のケースが見出されたことは、ここでの問題関心からして、きわめて重要な発見であるといわなければならない。

最後に、このような A と B の 2 つの種類の「折れ線グラフ」についての、第 13 次調査(2013 年)と第 14 次調査(2018 年)との結果の比較についていえば、多くの場合、両者にほとんど違いは見られない。ただし、その例外ともいえるべきものがないわけではない。それらは、以下のとおりである。

A.

「居住地域」と「信仰・信心」

「居住地域」と「あの世を信じる」

「学歴」と「あの世を信じる」

B.

「先祖を尊ぶ」と「世の中のため」

「学歴」と「あの世を信じる」

以上のケースにおいては、第 14 次調査の結果の方が、より「理論的に予測される関係」を示しているといえる。

4. おわりに

本稿では、「日本人の国民性調査」の第 14 次調査(2018 年実施)を中心に、それとの時系列的な比較のために第 13 次調査(2013 年実施)を取りあげ、それらのデータを用いて、

- (1) 宗教意識／宗教性に関する 4 つの質問項目に対する回答結果の「単純集計」による検討、
- (2) それら回答結果の相互間の関係性・共通性・内的整合性についての「相関マトリックス」「因子分析」「クロンバックの α 係数」による検討、
- (3) それら回答結果と「ソシオ・デモグラフィック諸項目(原因変数)」および「個人的-社会的意識・価値観の諸項目(結果変数)」との関係性・規定性・因果性を示す「折れ線グラフ」の検討、を試みた。

このような検討の結果、それぞれの検討のための技法に方法論的な問題は残されるにしても、少なくともつぎのようなことは確認することができた。

(1) の検討、つまり宗教意識、宗教性に関する 4 つの質問項目についての「回答の度数分布」の検討から、「その他・わからない」という回答の % が「宗教的な心は大切」の場合にやや高くなっている(第 13 次調査 13%, 第 14 次調査 18%)ことがわかる。

(2) の検討から、①これら 4 つの質問項目の相互間の関係を示す相関係数の「符号」はすべてプラスとなっている。②相関係数の値は 0.3 台が 1 ケース、0.2 台が 3 ケース、0.1 台が 2 ケースで、それぞれ大きなものとはいえない。③1 因子が抽出されたが、4 つの質問項目の「因子負荷量」は 0.3 台から 0.5 台の値となっており、低いレベルにとどまっている。④「クロンバックの α 係数」は 0.499 という低い値を示している。

(3) の検討から、これら 4 つの質問項目と、(A) ソシオ・デモグラフィック項目および (B) 個人的-社会的な意識・価値観との間に、多くの場合、「理論的に予測された関係性」が示されているものの、そのような関係性が示されなかったケースもある。それらは以下のケースである。

(A)

①「性別」と「信仰・信心を持っている」

②「年齢」と「あの世を信じる」

(B)

①「先祖を尊ぶ」と「他人はあなたを利用しようとしている」

②「あの世を信じる」と「他人はあなたを利用しようとしている」

③「先祖を尊ぶ」と「人は信頼できる」

④「あの世を信じる」と「人は信頼できる」

以上のような検討の結果から、本稿の問題関心からして、どのような今後の課題が導かれることになるであろうか。いうまでもなく、ここで検討のために利用した技法は、このような結果を「記述」する—問題の所在を明らかにする—ものであっても、そのような結果の原因—なぜ、このような結果が出てきたか—を「説明」するものではない。そのような「原因」の探究のためには、以下の2つが、さしあたっての課題となるであろう。

(1) 以上で検討してきた日本人の宗教意識／宗教性を捉える4つの質問項目では、「問 13a 信仰・信心を持っているか」を除く3つの質問項目の選択肢において、「その他[記入]欄」が設けられている。したがって、この選択肢の記入内容の「質的な分析」に期待が寄せられる。近年、国際比較調査の方法論的研究の領域において、「ある概念とその測定の国際比較の可能性を判断する統計的な検定の方法」が注目されるようになってきたが、このような研究の進展にともなって、社会現象の解明のためには、「統計的な検定」という「量的な分析」だけでなく、やはり「質的な分析」が重要であるということが再認識されるようになってきており、このような「量的分析」と「質的分析」を組み合わせる mixed methods approach が提案されるようになってきた (Braun and Johnson, 2018)。「日本人の国民性調査」のデータ分析においても、このような mixed methods approach は、きわめてプロミシングな課題といえるのではなかろうか。

(2) これら4項目は、L. Guttman の Facet Theory の用語でいうならば、いずれも「content の方向」で構成されているものの、その選択肢の「表現形式」の点においては、positive と negative の相対する方向からなる形と、真ん中に middle point (0 ポイント：具体的にいうならば、「普通」あるいは「どちらともきめかねる」) を置き、その両側に positive の方向と negative の方向を配した形、という2つのタイプに分けられる。以上の分析をとおして、このような選択肢の「表現形式」が質問項目の相互間の関係に何らかの影響を及ぼしていることが示唆された。しかし、この点については、さらにシステムティックな検討の試みが必要となってくることはいうまでもない。

謝 辞

まず、本特集号のオーガナイザの前田忠彦准教授は筆者に、今回のプロジェクトへの参加と原稿投稿の機会を与えてくださった。つぎに、質問紙法にもとづく日本人の宗教意識／宗教性の測定というテーマに関しては、北海道大学の櫻井義秀教授から、その方法論的な問題—例えば、それぞれの質問項目には多義的な意味内容が含まれている可能性があるという問題などをめぐって懇切なご教示をいただいた。最後に、データ分析のコンピュータ処理については、同じく北海道大学の清水香基助教にお世話になった。それぞれ、ここに記して心から感謝の意を表したい。

参 考 文 献

- Braun, Michael and Johnson, Timothy P. (2010). An illustrative review of techniques for detecting inequivalences, *Survey Methods in Multinational, Multiregional and Multicultural Context* (eds. J. Harkness et al.), John Wiley and Sons, Hoboken, New Jersey.
- Braun, Michael and Johnson, Timothy P. (2018). How should immigrants adapt to their country of residence?: A mixed methods approach to evaluate the international applicability of a question from the German general social survey (ALLBUS), *Cross-cultural Analysis: Methods and Applications* (eds. E. Davidov et al.), Routledge, New York.
- 林知己夫 (1961). 研究の概要, 国民性と質問項目の設定, 『日本人の国民性』, 至誠堂, 東京.
- 林知己夫, 林文 (1995). 国民性の国際比較, 統計数理, **43**(1), 27-80.
- Hill, Peter C. and Hood, Ralph W., Jr. (eds.) (1999). *Measures of Religiosity*, Religious Education Press, Birmingham, Alabama.
- Inglehart, Ronald. (1997). *Modernization and Postmodernization*, Princeton University Press, Princeton, New Jersey.
- Inkeles, Alex (1997). *National Character*, Transaction Publishers, New Brunswick, New Jersey. (吉野諒三 訳 (2003). 『国民性論』, 出光書店, 東京.)
- Jagodzinski, Wolfgang, 真鍋一史 (2013). 宗教性の「測度・指数・尺度」に関する実証的な検討—日本と欧米の国々にとの国際比較の視座から—, 関西学院大学社会学部紀要, **117**, 17-29.
- Levy, Shlomit (ed.) (1994). *Louis Guttman on Theory and Methodology: Selected Writings*, Dartmouth, Aldershot.
- Lewis-Beck, Michael S. (1994). Basic Measurement, *International Handbooks of Quantitative Applications in the Social Sciences*, Vol. 4, Sage, Thousand Oaks.
- Luckmann, Thomas (1967). *The Invisible Religion: The Problem of Religion in Modern Society*, The Macmillan Company, New York. (赤池憲昭, ヤン・スィングドー 訳 (1976). 『見えない宗教』, ヨルダン社, 東京.)
- 真鍋一史 (1985). 『世論の研究—内容分析と質問紙調査による接近—』, 慶應通信, 東京.
- 真鍋一史 (1998). 『国際イメージと広告』, 日経広告研究所, 東京.
- 真鍋一史 (2002). ファセット: ファセット・デザイン, ファセット・アナリシス, ファセット・セオリー, 『ファセット理論と解析事例』, ナカニシヤ出版, 京都.
- 真鍋一史 (2012). 社会科学はデータ・アーカイブに何を求めているか, 社会と調査, **8**, 16-23.
- 真鍋一史 (2019a). 「日本人の国民性調査」の二次分析の試み—宗教意識に関する質問諸項目をめぐる理論的考察と方法論的検討—, 青山スタンダード論集 **14**, 275-301.
- 真鍋一史 (2019b). 「日本人の国民性調査」の二次分析の試み—宗教意識に関する質問諸項目のデータ分析—, 関西学院大学社会学部紀要, **131**, 35-59.
- 真鍋一史 (2020). 『宗教意識の国際比較—質問紙調査のデータ分析—』, 北海道大学出版会, 札幌.
- 真鍋一史 (2021). ファセット・アプローチとウェルビーイングの研究, 関西学院大学社会学部紀要, **136**, 1-29.
- 三輪哲 (2007). 変数の合成と主成分分析, 『SPSSによる多変量解析』, オーム社, 東京.
- 西谷啓治 (1996). 『宗教と非宗教の間』, 岩波書店, 東京.
- Norris, Pippa and Inglehart, Ronald (2004). *Sacred and Secular*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 海野道郎 (1981). ある数理モデルの誕生, 関西学院大学社会学部紀要, **43**, 16-23.
- Wallace, Walter L. (1971). *The Logic of Science in Sociology*, Aldine, New York. (渡辺深 訳 (2018). 『科学論理の社会学—「ワラスの輪」というモデル—』, ミネルヴァ書房, 京都.)
- 渡邊大輔 (2012). 因子分析, 『社会調査の応用』, 弘文堂, 東京.
- 和辻哲郎 (1992). 『日本精神史研究』, 岩波文庫, 岩波書店, 東京.
- 吉野諒三 (1994). 国民性意識の国際比較調査研究, 統計数理, **42**(2), 259-276.

- 吉野諒三 (1998). 健康と生活満足, 『国民性七か国比較』, 出光書店, 東京.
- 吉野諒三 (2001). 『心を測る』, 朝倉書店, 東京.

Methodical Examination on Question Items Measuring Japanese Religious Consciousness/Religiosity: Secondary Analysis of the Japanese National Character Survey

Kazufumi Manabe

Visiting Professor, The Institute of Statistical Mathematics

This paper evaluates the theoretical background of the Japanese National Character Survey. It methodically examines the question items measuring Japanese religious consciousness/religiosity in the 13th and 14th surveys. The theoretical background is explored from the relevant descriptions in various publications about this survey, whereas “structural analysis” and a “item validity approach” are applied to four question items of Japanese religious consciousness/religiosity after checking the frequency distribution tables. The methods used for “structural analysis” are: (1) a correlation matrix, (2) factor analysis, and (3) Cronbach’s Alpha. The specific procedures in the “item validity approach” are examinations on (1) the relationships between the socio-demographic items and the religious consciousness/religiosity items, and (2) the relationships between the religious consciousness/religiosity items and the personal-social consciousness and value items.

The results reveal the following:

1. The relevant literature does not explain the theoretical background of these question items.
2. The four religious question items have low internal correlations, consistencies, and reliabilities.
3. The relationships between the socio-demographic items and the religious question items, and the relationships between the religious question items and the personal-social consciousness and value items are, in some cases, inconsistent with the theoretical predictions from the relevant literature.

In the future, the factors influencing these results should be explored. Specific strategies include:

1. Applying mixed-method approaches to explain the results by combining quantitative methods such as factor analysis with qualitative ones such as content analysis of open answers to probe questions.
2. Applying experimental design to systematically investigate the effects of the response styles used in the surveys.